

終戦秘話 - 留萌はソ連領だった -

昭和二十年八月二十三日留萌港はソ連軍の船舶で溢れかえっていた。とうとう恐れていたソ連軍の北海道侵攻作戦が始まった。その頃反対側の釧路港にもソ連兵が雪崩をうって上陸してきていた。南北海道にはアメリカ軍を主力とする連合軍の上陸も開始されていた。こうして留萌はソ連領となり、北海道は留萌と釧路を結ぶ線で二分割され、この線には直ちに鉄条網が張られ、北海道の住民はお互いに行き来のできない状態に置かれた。東西冷戦下におけるドイツや朝鮮半島等と同じ分裂国家が日本にも誕生したのである。

このようなシナリオが終戦時の日本に現出していたかもしれない。それはアメ

志 広 士 福
長係学館とさるの海

リカの原子爆弾によって阻止されたといっても過言ではない。アメリカは日米開戦の十ヵ月後に戦後の日本占領政策の研究に着手していた。



ソ連軍の進行経路と分断された北海道

十年になって、予想外の日本軍の抵抗が続いていたため、占領後も各地で多くの抵抗が続くことが予想された。この抵抗を押さえこむためには日本占領軍として

当時のハル国務長官を長とした「戦後計画委員会」は天皇制の存続と日本政府の自発的な統治の元に統一して日本の占領を行うことと一致した。しかし、昭和二

二十三个師団、八十万人の兵力を投入しなければならず、その負担は多きなものであった。このため、アメリカ軍部は占領政策を見直し、連合国による分割統治

をする方向へ転換していった。

アメリカは二月のヤルタ会談でソ連の参戦を密約したが、日本の降服にソ連が大きな役割を果たすことにより、ソ連から領土要求が出されることを懸念していた。もうすでに戦後のアメリカ、ソ連を二極とする冷戦構造が形を見せ始めており、アメリカは日本の降服を早期に実現しなくてはならない状況に追い込まれた。七月十六日ポツダムにいたトルーマン大統領の元に本国から至急電が届いた。原子爆弾の実験成功の報である。この原子爆弾が日本の息の根をとめ、日本は降服した。終戦直後の十六日、スターリンはトルーマンに北海道北半分をソ連の占領地とする書簡を送ったが、これは拒絶された。北海道への上陸作戦の候補地は留萌と釧路であった。作戦の決行予定日は八月二十三日であった。この前日に三船の悲劇がおこっている。